

Title	關山直太郎編著『初期社会主義資料』：牟婁新報抄録
Sub Title	Naotaro Sekiyama (ed.) : "Some documents on the socialism in the Meiji era"
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1960
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.33, No.3 (1960. 3) ,p.96- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19600315-0096

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介

關山直太郎編著

『初期社會主義資料』

——牟婁新報抄録——

一 和歌山縣の片隅、田邊町（現在は市）で發行された一地方新聞『牟婁新報』が近代日本史研究の上でとりあげられるようになったのはごく最近のことである。

『日本近代佛敎史研究』（吉川弘文館、昭和三十四年三月）の著者吉田久一助教授はその著の第六章第三節において『牟婁新報』と社會主義者グループとの關係を論じられたが、これにより一躍『牟婁新報』の存在とそれのもつ重要性が世に明らかにされた。吉田助教授はその書のなかで、『牟婁新報』の記者で、社會主義者であつた者は五名に達する。小田野聲・豊田孤寒・荒畑寒村・菅野幽月・大石誠之助である。『牟婁』の社會主義論說について紹介されたことがないし、平民社落城後、日本社會主義運動史に一つの役割を持つ

ていると思うから解説してみよう」（五一―六頁）といい、「平民社落城後の社會運動にとつて、『牟婁』がかすかな希望の一つであつたといつてもよい」（同上）とされて地方に埋もれていた『牟婁新報』を初めて紹介された。

吉田助教授から『牟婁新報』の所在とそれに關係した人々、そこで主張されている社會主義論說、幸徳事件との關係について明らかにされたとき、われわれはこれが何とかわれわれの共有財産にならないものかと切望したものであつた。貴重な『牟婁新報』は和歌山大學の關山直太郎教授の手で、同大學經濟學部の所藏に歸したことも吉田助教授の書中で知つた。

われわれの希望は意外に早くかなえられる日がきた。關山教授は『初期社會主義資料——牟婁新報抄録——』を公刊されて埋もれていた寶庫をわれわれの前に公開して下さつたのである。

二 本書は明治三十四年から明治四十五年までに『牟婁新報』に掲載されたもののなかから、とくに社會主義的色彩の濃厚なものを採録したものであるが、さらに數葉の口繪、索引、不採録主要項目、解説までつけ加えられてあつてわれわれの研究に一層の便利をあたえてくれる。

『牟婁新報』の歴史とその位置、つけおよびここに収録されたものの意義については關山教授の十七頁におよぶ「解説」のなかにすべ

てが詳述されていてこれにつけ加えるべきものは何一つないときえ思える。そこでここでは筆者が特に感じた點二、三について書き留めることにする。

『牟婁新報』は明治三十三年四月に發刊され、昭和六年三月までつづいたようである。同紙が何らかの意味で社會主義との關係をもつものとして世に知られてきたのは明治三十七、八年頃からで、その後數年が同紙の社會主義的色調の一番濃い時代であつたといふ。本書は、さきにもふれたようにこの時代に基準をおいて明治三十四年から同四十五年までのものの中から收録されている。論說、記事、感想、詩文、消息のうち多少とも社會主義に關するもの、あるいは社會主義的志向のもの、もしくはこれと同調するような、いわば當時としては進歩的な傾向を示すものを主として採録し、また直接右のような傾向を示さなくとも、社會主義者あるいはその同調者もしくは親縁者の論文や隨筆類、さらにはこれらの人々の傳記材料として幾分でも寄與しそうなものを收録したといふ。

『牟婁新報』は社會主義を宣傳普及するのが目的でなく、あくまでも一地方紙であり商業新聞であつた。荒畑寒村が「退社の辭」(二五九頁)でいつているように、その論壇において、社會主義をいかに鼓吹しても、三面記事においては姦通、窃盜、強盜、放火、自殺等々の筆をとらなくてはならなかつた。社會主義者の機關誌『平

民新聞』、『直言』、『光』には同系の友紙として『牟婁新報』はしば紹介されたが、社會主義の機關紙そのものではなかつた。

しかしながら小田頼造、豊田孤寒、荒畑寒村、菅野須賀子がその記者として社會主義の宣傳をし、大石誠之助、成石平四郎、かさかに寄稿し、堺利彦、幸徳秋水、木下尚江の名前も見える同紙はたしかに『平民新聞』その他の友紙であつた。小田、荒畑、菅野が同紙の記者として赴任しえたのも堺利彦の紹介によるのであつた。

小田は明治三十七年三月に田邊に來任し、ただちに三ヶ月にわたる「新時代の警鐘」なる長論文を書きはじめたが、平民社における小田は幸徳、堺、木下、安部らの大先輩の陰にかくれてその存在すらかすんでいた。平民社の名物傳道行商をはじめたのが小田であり、彼は初めて千葉縣下に傳道行商をころみてもまもなく堺によびよせられ、行商中途で田邊へ赴任したのである。荒畑にしても平民社時代は小田とまったく同じく横濱曙會の有力メンバーとして、また東北地方傳道行商を試みた者としてはいられていたが、中央で筆を振るほどではなかつた。菅野須賀子にいたつては地方通信のなかに二、三回みえる程度でその存在は小田、荒畑とは比較にならぬほど軽い存在である。

石川三四郎、西川光二郎らの平民社入社の際と比較して小田の『牟婁新報』への「入社の際」(二〇頁)は何と壮大なひびきをもつ

ていることか。こんな點にもうかがえるように小田、荒畑、管野そして豊田といった青年社會主義者には『牟婁新報』は未熟ながらも自己の力を十二分に發揮できる新天地であつた。こうした若い主義者の練成の場であつたことは注意されてよい。

このことと關連してこれら右の四人の青年社會主義者、さらに大石、成石ら幸徳事件の犠牲者のこの期の活動と思想がかなりあきらかにされたことは何といつても喜ばしい。さらに私見をさしはさむことを許されるならば、赤旗事件以後幸徳事件にいたるまでの社會主義者のなかで管野須賀子の占める位置が低く評價されていすぎるのではないかと思う。やがて幸徳事件五十周年をむかえ、各種の出版や行事が企畫されているが、その中心に幸徳一人だけがおかれている。事件の事實上の推進者は管野であつたと筆者は信ずるが、彼女の研究はほとんどなされていない。管野にたいする評價の低い一つの理由は資料の乏しさにもよるのだと思う。その意味で彼女の『牟婁新報』時代の資料がかくも大量に明らかにされたことは本格的な管野研究への道を開くものといつてよいだろう。

『牟婁新報』の社會主義的主張と中央の社會主義者の主張とのあいだでもつとも大きい、ほとんど唯一といつてよいほどの相違點は戦争にたいする態度である。主筆(時には社長でもあつた)の柴庵毛利清雅は新佛敎派に屬し、かならずしも、社會主義者とはいえない

いが、佛敎の極致は社會主義の理想社會と一致すると考えていた。その點で彼のいう所は社會主義者の考えと多く共通し、關山敎授の言葉をもつてすれば柴庵の思想は「佛敎社會主義」ともいえるものであつた。この柴庵は日露戦争に反對しないという點で、いや積極的にこの戦争を支持したという點で幸徳・堺らの立場とは異なつていた。「牟婁新報」の先生方は先きには提燈行列の隊長となり、今は社會主義演説會を開いて平和を唱へつゝあり、新聞記者も中か／＼多忙なる哉」という讀者の投稿にたいして「征露戦争は我國の權利なり、予等は斷じて此戦争に與みせざる能はず、祝捷行列の如き蓋し軍國民の感情を表出すべき唯一の方法なるべし、故に予等は行列の隊長たるを辭せず、然れども之れと同時に社會の貧者弱者を救済すべき大任あるを思ふ。社會問題演説會の如きは則ち之れが爲めに開かるべし、而うして多忙は人間の義務なりと予は思惟す」(「投書函」六五頁)と社の態度について答えているが、これは柴庵の筆になつたものであらう。「柴庵君足下、君は主戰論者だと言はれたが僕も決して非戰論者ではないよ」(「編輯局へ」二三四頁)という大石誠之助(祿亭)の言葉や「牟婁新報記者には社會主義者もあり、然れども新報の主張は日露戦争を以て當然開始せらる可きものと認め盛んに戦争を主張したるなり、故に牟婁新報を讀まば社會主義を學び得可し、軍閥の壯烈にも接觸し得可し、非戰論者も戦争論者も

共に通讀せらるべし、而うして吾社の主張は此中に自ら一道の清流となつて發露しつゝあると認め得可し」(「投書函」二五八頁)といふ社の態度の表明の中にも社會主義を主張しながら平民社系の社會主義者と異なり反戦ではなかつたという複雑な點がわかる。

中央における社會主義者の活動と思想はこれまでにかなり究められてきた。これからの課題は中央と地方とのつながりや、地方における運動の展開過程であろう。本書は明治三十年代中頃から明治の終りまでに亙る一地方の社會主義者の活動とその思想の滲透の度合を研究する上に缺くべからざる資料を提供するものである。關山教授の勞に深甚なる感謝をする次第である。(吉川弘文館 六三〇圓)

(中村勝範)

T. F. T. Plucknett:

Early English Legal Literature

London: Cambridge University Press, 1958.

114pp. 18 s. 6 d.

プラクネット著

『英法初期の文献』

プラクネット Plucknett は、現在ロンドン大學において、法制

紹介と批評

史の講座を擔當する教授である。一九五〇年、彼は、有名な法制史學者「メイトランド F. W. Maitland の生誕百年を記念し、ケムブリッジ大學・メイトランド記念財團 F. W. Maitland Memorial Fund の主催した、記念講演に講師として招かれ、六日間にわたり、講演した。ここに紹介する著作は、この際行われた、六つの演説を、一冊の本にまとめて刊行したものである。なお、本書の冒頭に掲げられた「メイトランドの法および歴史に関する見解」と題する一文は、既に「Law Quarterly Review」誌上に、發表をみているが、他の五つの論文は、いずれも、今回始めて公刊された、斬新な文章である。

一 「メイトランドの法および歴史に関する見解」と題する一章において、プラクネットは、まず、偉大な法制史學者、メイトランドの、不朽の作品を、現代の立場から、再評價することから始める。

中世英國の莊園に関する研究において、メイトランドは、所謂古典學派の始祖の一人として、ユニークな立場を築き上げることに成功した。しかし、近年、彼を中心とするいわゆる古典學派の立論は、新しい史實の考證に基づき「コスミンスキ E. A. Kosminskii, ポスタン M. M. Postan」といった學者達により、強く批判されるに至つた。この事實は、メイトランドの作品の學問的價値を、いさ